

キリスト教とハンセン病についての覚書

木 鎌 耕 一 郎

要 旨

ハンセン病をめぐる聖書翻訳の歴史に関する諸研究を整理したうえで、青森県の国立療養所松丘保養園内にある松丘カトリック教会の設立に携わったケベック外国宣教会の活動についてまとめた。ハンセン病は古くは「らい病」と呼ばれ、世界の各地で治療不能な忌まわしい天刑病、業病として恐れられ、患者の人権は侵害されてきた。「らい病」という表現は、そのような差別や人権侵害の記憶と結びついている。ハンセン病は旧約聖書と新約聖書にも登場し、聖書翻訳の歴史のなかで生じた混乱と誤解がハンセン病患者に対する偏見を生んだひとつの要因であるとの認識から、近代語では訳について様々な工夫がなされているが、課題も多いことを示す。また、ケベック外国宣教会による松丘カトリック教会の設立経緯を、キリスト教福祉の史的展開に位置づけて論じる。

Key words: キリスト教, ハンセン病, 聖書翻訳, ケベック外国宣教会, 国立療養所松丘保養園

はじめに

本稿は、平成22年度八戸大学特別研究費人間健康学部プロジェクト(共同研究テーマ「三八地区における健康影響の近未来予測」)における個別研究「青森県におけるケベック外国宣教会の活動」の研究成果報告書であるが、研究の過程で調査内容の射程が広がり、結果として「キリスト教とハンセン病についての覚書」というテーマで報告することとした。

ケベック外国宣教会は半世紀以上にわたり、青森県とつながりをもってきたカナダのカトリック宣教会である。青森市にある国立療養所松丘保養園の敷地内には、ケベック外国宣教会により設立された松丘カトリック教会がある。国立療養所松丘保養園は、1909(明治42)年に設立された日本最北の国立のハンセン病療養施設である。政教分離の原則からすると国立施

設内に宗教施設が設置されていることに奇妙な印象を受けるであろうが、実際のところ、全国の国立療養所にはキリスト教系、仏教系等の宗教施設や団体が複数存在するのが常態である。松丘カトリック教会は、1957(昭和32)年にケベック外国宣教会の援助によって設立された。本研究は、戦後から青森県を拠点に宣教司牧活動に従事しているケベック外国宣教会におけるハンセン病施設内での宣教司牧と教会設立の経緯についての諸情報を調査するものである。なお、松丘カトリック教会の所在地は共同研究テーマである「三八地区」に該当しないが、ケベック外国宣教会は、戦後、三八地区を含む青森県全域を宣教対象としていたこと、ハンセン病施設をめぐる問題という点で「健康影響」というプロジェクトテーマに沿うものと捉え、個別研究の申請をした。

ところでキリスト教は、療養施設の設立や聖書翻訳の歴史において、ハンセン病と深い関わりを有しており、それらの歴史的背景は大きい。

調査の過程で、教会設立史や施設史の諸情報に基づく調査だけでは汲み取ることはできない特有の領域であることが知られた。特に聖書におけるハンセン病の表現や扱い方は、現代に至るまで議論の渦中にある。そこで本稿では、そもそもキリスト教とハンセン病にどのような歴史的な関係があるかについて基礎的な理解を得ることを優先し、聖書翻訳の問題に的を絞って諸先行研究をレビューし、第1章に記した。本来の研究目的であるケベック外国宣教会における松丘保養園における松丘カトリック教会設立に至る経緯については、第2章に記した。以上2章を以て特別研究の報告としたい。

第1章 ハンセン病をめぐる聖書翻訳の問題

1. ハンセン病と聖書

ハンセン病は、「らい菌」により皮膚や神経が侵される感染症である。1873年に「らい菌」(*Mycobacterium leprae*)がノルウェーの医師アルマウエル・ハンセンによって発見されたため、彼の名前から「ハンセン病」(*Hansen's disease*)と呼ばれている。しかしこの病は、古くから「らい病」と呼ばれ、世界の各地で治療不可能な忌まわしい天刑病、業病として恐れられ、患者の人権は侵害されてきた。「らい病」という表現は、そのような差別や人権侵害の記憶と結びついている。20世紀半ばには、世界的に「らい病」という表現を「ハンセン病」に変えようとする運動がおこり、日本でも改称した機関があった¹。しかし、日本の「らい予防法」の呼称は改められず、その廃止も1996(平成8)年と遅かった。

旧約聖書(ヘブライ語聖書)において、日本

語で「らい病」と訳されていた語は、ヘブライ語の「צָרַעַת *Zaraath* ツアラアト」である。これはギリシャ語、ラテン語訳の聖書では「λεπρα *Lepra* レプラ」と表記され、英語でも *leprosy* である。日本語訳の聖書では、これらの言葉を従来「らい病」と訳してきた。しかし現在では、翻訳に際して「らい」という表現を避ける傾向にある²。そこには、これらの語が本来指し示す意味が、固有の疾病の名称であるハンセン病ではないという理解とともに、聖書翻訳の歴史のなかで生じた混乱と誤解がハンセン病患者に対する偏見を生んだひとつの要因であるとの認識がある。

2. 旧約聖書の「ツアラアト」

旧約聖書の「ツアラアト」が、言葉の本来の意味において、ハンセン病という特定の疾病と

² カトリックとプロテスタントによる共同訳で日本聖書協会が発行している「新共同訳聖書」では、1987年に旧約で「重い皮膚病」と表記するようになったが、新約では「らい」のままであった。1997年からは、新約でも「重い皮膚病」と表記している。他方、日本聖書刊行会による「新改訳聖書」第三版(2003年)では「ツアラアト」「レプラ」が「ツアラアトに冒された者・人」と訳されている。第三版の改訂は文体等の大がかりな改訂ではなく「差別語、不快語、とりわけ訳語『らい病(人)』の見直しが中心」であったとされる。聖書のメッセージは差別と不快からの解放であり、その描写を「耳に響きのよい言葉に置き換えて、差別や不快の現実を見えにくくするなら、それは聖書そのものの使信を弱めてしまう」可能性があることを問題意識として持ちながら、他方では、現代社会では受け入れられない「差別語・不快語」を用いることが「社会に広く行き渡るべき教会公同(同)の聖書の公的生活に反する」ことも承知した上で、議論を重ね、造語を含めた代案を練り、アンケート調査まで行って、訳語を検討した経緯が記されている。結果的に「ツアラアトに冒された者・人」となったが、それは「単なる置き換え」ではなく、「読者に解釈していただく、学んでいただく」ために、あえて解釈を含めなかったとされる。新改訳聖書刊行会の編集委員の手による第三版の解説書である新改訳聖書刊行会編『聖書翻訳を考える―『新改訳聖書』第三版の出版に際して』いのちのことば社2004年(主に99-112頁)を参照。

¹ 例えば、アメリカ医学会は1952年に *leprosy* という呼称を *Hansen's disease* に改めた。また日本のハンセン病患者の団体「全国国立療養所患者協議会」(全療患協)は、1953年に「全国国立療養所ハンセン氏病患者協議会」と改称した。

は異なるという一般的な理解について、本節で整理をしておきたい。

現在、日本聖書協会発行の新共同訳聖書では、「ツァラアト」を「重い皮膚病」と訳している³。新共同訳では、「ツァラアト」が祭儀的な意味を有し、「人について用いられている場合には、何らかの皮膚の疾患を指すが、病理学的にはいかなる病気であったか明瞭ではない」として、「らい病」という特定の疾患にあたらないと解説している⁴。旧約聖書の中で「ツァラアト」という語が登場するのは、主にレビ記 13 章と 14 章である。レビ記 13 章では、「ツァラアト」は、人の皮膚に生じる様々な症状として説明されるだけでなく、衣服に生じる「かび」もまた「ツァラアト」であり、どちらも汚れた状態を指している。14 章では、そのような汚れを祭司が検分し、「ツァラアト」と認められなかった場合の清めの祭儀の方法について記されている。加えて、14 章では「ツァラアト」

の対象は家屋に生じる「かび」にまで広げられている。14 章の結びにあたる 54-57 節では、13 章と 14 章を要約し「以上は、あらゆる重い皮膚病、白癬、衣服と家屋のかび、湿疹、斑点、疱疹に関する、汚れと清めの宣告の時について指示である。」⁵と記されている。

このように旧約聖書の「ツァラアト」は、人間について用いられる場合、皮膚表面に様々な症状を伴う皮膚病を示しているが、それは特定の疾病としての皮膚病を意味するものではなく、さらには衣服や家屋の「かび」をも指す広い概念である⁶。さらに、この言葉は、単に人や物の表面に見られる症状を指すのではなく、むしろ宗教的な意味での「汚れ」として、祭儀的に祭司によって「清められる」対象であることが含意されている。古代イスラエル社会では医師による病気の治療はある程度行われていたが、「ツァラアト」に限っては、あくまで祭司が清める対象であり、主にその原因は人間の罪に対する神の怒りの結果としての罰であった。神の罰、人間に巢食う罪の存在は、信仰共同体から排除しなければならない。そこで祭司が祭儀的作法に則って、皮膚病の症状を細かく分析し、清められたか否かを判断した。人間だけでなく衣服や建物の染みや腐食等による汚れも忌

³ 例えば、レビ記 13 章 1-3 節は次のように記されている。「主はモーセとアロンに仰せになった。もし、皮膚に湿疹、斑点、疱疹が生じて、皮膚病の疑いがある場合、その人を祭司アロンのところか彼の家系の祭司の一人のところへ連れて行く。祭司はその人の皮膚の患部を調べる。患部の毛が白くなっており、症状が皮下組織に深く及んでいるならば、それは重い皮膚病である。祭司は、調べた後その人に『あなたは汚れている』と言い渡す。」

⁴ 「新共同訳聖書」（バイブルプラスカラー資料つき 聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき 2009 年）では巻末の用語解説（6 頁）で、「重い皮膚病」について次のように説明している。「旧約聖書のヘブライ語『ツァラアト』、新約聖書のギリシア語『レブラ』の訳語。七十人訳ギリシア語聖書が『ツァラアト』を『レブラ』と訳し、新約聖書は『レブラ』を踏襲している。『ツァラアト』はその語源も意味も明らかでない。『ツァラアト』は祭儀的な汚れという観点から人や物について書かれている。人について用いられている場合には、何らかの皮膚の疾患を指すが、病理学的にはいかなる病気であったか明瞭ではない。レビ記 13～14 章に詳しい記述がある。『レブラ』も同じく祭儀的な汚れの意味で用いられ、その病の人々をイエスが癒されたことが、奇跡的な出来事として記されている。（マコ 1: 40-45、ルカ 17: 11-19）」

⁵ 新共同訳に依る。

⁶ レビ記 13 章の注解によれば、「二-四六節は人体の皮膚に生じる様々な症状に対して、祭司はある基準をもって観察し、その人は汚れている、あるいは清いと宣言を下すための指示である。この《皮膚病》「ツァラアト」は従来癩病と訳されてきたが、皮膚に現れた症状によっては清いと宣言されてその後悪化したため汚れていると宣告されたかと思うと、逆に汚れていると宣告された後に症状が良くなり清いと宣告される場合もある。従ってこれは癩病ではなく重い皮膚病であるとする見方が有力である。しかし、他方において悪化していく症状の中に癩病を認める立場もある。従ってこの章で扱われている症状には軽い皮膚病や重い皮膚病やさらに癩病の症状が混在していると考えた方がよいであろう。」とあり、「ツァラアト」は広い概念として捉えられている。『新共同訳旧約聖書注解 I 創世記一エステル記』1996 年 日本キリスト教団出版局（221 頁）

避され、祭司による検分が必要とされた。旧約聖書の「ツァラアト」は、神から特別に選ばれた民としてのユダヤ人の信仰に深く根ざした言葉であり、特定の病原菌から生じる皮膚病とは根本的に区別されなければならない。新共同訳はこのような立場から、「らい」という訳をやめ、人間の「ツァラアト」であれば「(重い)皮膚病」、衣服や家屋の「ツァラアト」であれば「かび」と訳し分けている。ただし、新共同訳の『注解』では、「重い皮膚病」の中にハンセン病が混在している可能性を否定していない⁷。

レビ記を含むモーセ五書が書かれた古代パレスチナ地方に、そもそもハンセン病が存在しなかったという見方もある。犀川一夫氏は、「ツァラアト」がハンセン病ではないとする根拠として、ハンセン病が古代パレスチナ地方に存在した証拠がない点を挙げている。すなわち、考古学的調査では紀元前にハンセン病の存在が確認できたのは、エリオット・スミスによるエジプトのミイラの調査(1924年)のみであり、エジプトを除く古代オリエント地域にハンセン病が存在していた証拠がない。さらに、パレスチナ地方にハンセン病が伝わったのは、前334年に開始されたアレクサンダー大王の東方遠征の頃であり、モーセ五書がバビロン捕囚時代(前575-538年)に編集され、その資料は前9世紀以前に遡ることから、旧約聖書の「ツァラアト」はハンセン病を含まない。また、仮にモーセ五書が記された時期にハンセン病が存在し「ツァラアト」をハンセン病と見なしていたとすれば、末梢神経の麻痺症状など特有の症状が明記されていないことは不合理である、と結論付けている⁸。

3. ギリシャ語の「レブラ」

次にヘブライ語聖書がギリシャ語に翻訳され

るにあたり、「ツァラアト」が「レブラ」と訳された経緯を、歴史的背景とともに確認しておく。

前587年のバビロン捕囚以降、古代オリエント世界にユダヤ人が拡散するなか、前332年にアレクサンダー大王が東方遠征を開始し、エルサレムも占領された。地中海沿岸地方や小アジア各地にはギリシャ文化が根付いていく。ユダヤ人もヘレニズム化し、オリエント世界の共通語としてのギリシャ語を用いる者が増えていった。そこで前250年頃、ヘブライ語の聖書をギリシャ語に翻訳する事業が行われた。エジプトのプトレマイオス2世の命によりアレクサンドリアの図書館にいた70人のユダヤ人長老によって翻訳されたという言い伝えから、この聖書は「七十人訳聖書」と言われる。

この翻訳事業の際、ヘブライ語の「ツァラアト」は、「レブラ」と訳された。「レブラ」も、特定の疾病としてのハンセン病ではなく、やはり皮膚の多様な症状のことを指していたと考えられている⁹。というのも、この当時すでにアレクサンドリアではギリシャ医学の権威ヒポクラテス(Hippocrates 前450-370年)の学派の研究成果が、医学書『ヒポクラテス全集』として編纂されていた。そこではハンセン病を「象皮病 Elephantiasis」と称している。全集には「レブラ」という用語も出てくるが、病名としてではなく「皮膚の種々なる症候群」を意味したという¹⁰。仮に、「七十人訳聖書」の翻訳者たちがヘブライ語「ツァラアト」をハンセン病を示すものとして理解していたとすれば、Elephantia-

⁹ 犀川一夫の上掲書(127頁)によると、ギリシャ語の「レブラ」は「『皮を剥ぐ』、『鞘を取る』、『鱗を取る』、『樹皮を剥ぐ』、『皮膚を擦りむく』などを意味を持つ言葉の派生語で、物体の表面に存在する『しみ』、『汚れ』、『痣』、『痂皮』、『斑点』を指し、医学用語ではあるが疾病の名称ではない。さらに「祭儀的意味」が含まれていないことから、「レブラ」は「ツァラアト」の意味を完全に表現していない訳語であると指摘されている。

¹⁰ 犀川一夫上掲書(125-126頁)

⁷ 同上

⁸ 犀川一夫『聖書のらい その考古学・医学・神学的解明』新教出版社1994年(28-29頁, 63-65頁, 66-69頁)

sis と訳したはずである。ユダヤ教徒である翻訳者たちが、ヘブライ語聖書の文脈から「レブラ」を宗教的、祭儀的な意味を含むものとして理解し訳したことは容易に想像できる。

さて、キリスト教が成立し、イエスの伝記や弟子たちの言動や書簡が「新約聖書」として編集されたが、これもギリシャ語で書かれた。そして、福音書のイエスや使徒の言葉の中には、「レブラ」が登場する。表記そのものは「七十人訳聖書」のギリシャ語からそのまま引き継いだものと考えられている。問題は、新約の時代に、「レブラ」がハンセン病という特定の疾患の名称として理解されていたかであるが、新約聖書でも「レブラ」に対しては他の疾病と異なり、「清められる」とか「清くなる」といった表現が用いられ、旧約同様の文脈で祭儀的、宗教的意味を含んでいると考えられる。

たとえば、共観福音書の並行箇所として、「マルコによる福音書」1章40-45節、「マタイによる福音書」8章1-4節、「ルカによる福音書」5章12-16節が挙げられる¹¹。イエスが「重い皮膚病」（レブラ）を患っている人を癒す場面が描かれており、いずれもイエスが発した言葉は「よろしい、清くなれ」である。さらにその者に対して「行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい」（マルコ）と語っている。「レブラ」はイエスによって清められたが、清くなったか否

かを検分するのは祭司の仕事であり、清くなったことが認められればレビ記に記されているような捧げ物を献上する儀礼が課され、その者は社会復帰する。そのような当時の宗教的社会的慣習に基づいて、イエスはその者を祭司のところへ赴かせたのである。

新約聖書では、イエスの「清め」の行為が話題とされ、旧約聖書に記されるような皮膚症状の細かな描写は一切ない。福音書の記者たちにとって重要なことは、当時、罪の結果としての神からの罰と見なされていた「レブラ」の人に直接触れ、食事を共にするなど、タブー視されていた行為を通して、イエスが律法の下で罪人と見なされていた社会的弱者の現実に介入したことであった。さらに「レブラ」の清めは、救い主メシアのしるしとされている¹²。福音書記者にとって、「レブラ」の人を清めるエピソードを通して、イエスがメシアであることを示すことが主眼であり、「レブラ」の症状がどのようなものであるかは重要ではなかった。

4. ヴルガタ版の普及と医学用語としての「レブラ」

キリスト教は次第にローマ帝国内に普及していき、当初は迫害を受けていたものの、4世紀には公認宗教となった。ローマ帝国の興隆により、地中海沿岸地域がギリシャ語からラテン語文化圏となるに及び、ラテン語訳聖書が必要となった。教皇の命によりヒエロニムス（Hiero-

¹¹ 新約聖書では「レブラ」は共観福音書のみに登場する。楠本史朗氏は、共観福音書の「レブラ」を「神の呪い」ではなく、「キリストの主権により克服されるべきもの」と見ている。また、ハンセン病との関わりについては、「新約のレブラの概念は旧約のツァラアトのそれをそのまま受け継いでいる。特定の疾病を指すのではなく、著しい皮膚病疾患の総称を示しており、ツァラアトの定義、およびその清めによる確認については、基本的にレビ記13-14章の律法規定を受け入れている。旧約同様、祭儀上の浄不浄が問題とされ、したがって『清め』が課題となる。」と指摘し、新約聖書の「レブラ」がハンセン病とはいえないと結論付けている。楠本史朗『聖書翻訳史の光と陰 下』『北陸学院短期大学紀要40』2008年（6-9頁）

¹² マタイ11章2-14節に、洗礼者ヨハネが自分の弟子をイエスの下に遣わし、イエスが「来るべき方」か否かを問う場面があり、ここに「レブラ」が登場している。ヨハネの弟子に対してイエスは「行って、見聞かしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」と回答した。この回答はイエスがメシアであることを告げる記述であり、メシアであることの「しるし」として、不治の「レブラ」を清め、死者を蘇らせる力を挙げている。ルカ7章18-26節も同様。

nymus 340-419 年) が約 20 年をかけて標準ラテン語訳を完成した。これは「ウルガタ版(ラテン語標準訳) 聖書」として、その後広く西洋中世世界で用いられた。ヒエロニムスは、このラテン語訳聖書において、「レプラ」を訳すに際し、「七十人訳聖書」のギリシャ語「λεπρα」の読みを、そのままラテン文字で「lepra」と置き換えた。ところが、聖書とは別の分野で、「レプラ」という用語がローマ世界に広がる事態が生じる。それは医学用語としての「レプラ」である。

ギリシャ語文化圏からラテン語文化圏に文化の中心が移るにつれて、医学界では前述のヒポクラテスとならびガレノス(Galenus 131-202 年) が権威となった¹³。小アジアのベルガモン出身でアレクサンドリアなどで医学を学んだ医師ガレノスは、ローマで活躍し、皇帝マルクス・アウレリウスの侍医にもなった人物である。生理学や解剖学の分野で、西洋中世を通して権威となり、その影響はイスラム世界にも及んだ。ガレノスは、ハンセン病の名称としてヒポクラテスの「象皮症」を用いつつも、その中で皮疹を主な症状とする型を「レプラ」と称した¹⁴。

この影響により、レプラという言葉は、次第にハンセン病全体の呼称として定着していった。ヒエロニムスがラテン語訳聖書を完成させたのは、ガレノスより後であるが、彼が「レプラ」に対するこのような医学界の呼称を意識していたかどうかは定かではない。一般には、ギリシャ語から機械的に借用したにすぎないと理解されている¹⁵。

古代ローマにおいては科学や思想の面で秀でたギリシャ文化は学ぶべき対象であり、「文化的教養を欲するローマ人はギリシャ語を学ばねばならず、自らの教養を売ろうと欲するギリシャ人はその主人であるローマ人の言語を学ばねばならず、政治的優位にあったローマは「文化的にギリシャの一属領になることをいさぎよしとしない国民的プライドにうながされ、ギリシャの文学的および科学的文化をラテン語に移す努力」にとりかかっていた時代である¹⁶。

アラビア医学で「象皮病」は「フィラリア」を意味していた。中世後期以降、優勢だったアラビア医学の用語の普及により、「象皮病」は「フィラリア」を意味するようになり、一部の症状を指すのみだった「レプラ」がハンセン病の総称のように理解されることになったという。

¹³ 伊藤俊太郎『近代科学の源流』中央公論社 1978 年では、ガレノスを次のように紹介している。「彼は生理学の著作『自然の能力について』*De facultate naturali* や、解剖学の著作『部分の使用について』*De usu partium* など、一五三編に及ぶ医書を著わし、これらはヒポクラテス Hippocrates 以降の古代が達しえた医学知識の最高の水準を示している。医学理論は主としてヒポクラテスに従っているとはいえ、その議論はしばしば彼自身の独創的実験と結びつけられており、古代・中世を通じて彼は最もすぐれた生理学・解剖学の権威とされた。」(49 頁) なお、上記引用にある著作のうち最初のものは、次の邦訳がある。内山勝利編訳・種山恭子訳『ガレノス 自然の機能について』(西洋古典叢書) 京都大学学術出版会 1998 年

¹⁴ 犀川一夫 上掲書 (111-112 頁) 犀川氏はここで、10 世紀にアラビア医学が西洋に流入した際にも、言語上の混乱が生じたと指摘している。すなわち、前述のようにギリシャ語・ラテン語世界では、ヒポクラテス以来の伝統的用語としてハンセン病を「象皮病」と呼んでおり、ガレノスがその一部の症状を「レプラ」と呼んだが、

¹⁵ 楠本史郎 上掲論文 (8-9 頁) しかし、ヒエロニムスがウルガタ版聖書で解釈上、おそらく意図的に「レプラ」を付加した個所も知られている。それは、イザヤ書 53 章 4 節の「彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに わたしたちは思っていた神の手にかかり、打たれたから 彼は苦しんでいるのだ、と。」(新共同訳) という個所である。この個所は、キリスト教的には、救い主イエスが人間の罪のあがないのために痛みや病に打たれているのに、人々はイエスの受難を神の罰だと軽蔑し、見捨てたという解釈が成り立つ。この個所にウルガタ版では *quasi leprosum* 「らい病人のようになって」という言葉を付け加えている。X. レオン デュフル編／Z. イェール訳監『聖書思想事典』三省堂 1973 年 (859 頁) を参照。これは翻訳の問題というよりは、イザヤ書解釈の問題である。イザヤ 53 章の「僕」が神に「打たれる」場面が、「〈らい〉を意味」という解釈については、播磨醇『極限で見たキリスト—聖書の〈らい〉をめぐる—』キリスト教図書出版社 2007 年 (58 頁) を参照。

¹⁶ B. ファリントン著／出隆訳『ギリシャ人の科学—その現代への意義—(下)』岩波新書 1968 年

他方で、ギリシャ科学を身に付けたガレノスの側からすれば、「その当時立身出世を願う地方在住の人々のあこがれの都であったローマに引き寄せられた」¹⁷ ためにローマに活躍の場を見出した。ギリシャ語を扱うガレノスが、ハンセン病の一部の症状を「レプラ」というギリシャ語でラテン語世界に紹介し、ヒエロニムスが聖書翻訳にあたりギリシャ語の「レプラ」をラテン語で表現せずにそのまま残留させた背景には、二言語が錯綜していた時代の影響も留意すべきであろう。

ともあれ、ヒエロニムスが聖書の伝統に従い、宗教的祭儀の意味を含みもつ用語として「レプラ」を理解していたとしても、医学用語としてハンセン病を意味する「レプラ」という用語の普及により、聖書本来の意味とは異なる「読み」が生じることとなった。すなわち、聖書の「レプラ」がハンセン病という特定の皮膚病を指すものとして理解された。さらには人間の罪の結果としての神の罰という旧約聖書以来の宗教的意味合いが重ねあわされた。こうしてハンセン病患者は、宗教的な意味で差別と偏見の対象となった。

5. 英語訳聖書との比較

近代以降の英語訳聖書では、「ツァラアト」「レプラ」は *leprosy* と訳され、ハンセン病を意味する用語として理解されてきた。日本語訳聖書も英語訳聖書から多大な影響を受けている。しかし、近代以降のスタンダードな英語訳聖書を実際に見比べてみると、現代の日本語訳に見られる「重い皮膚病」「かび」が決してスタンダードな表現ではなく、むしろ日本に固有な問題を内包していることが浮かび上がってくる。

ここでは、試みにレビ記 13 章 2 節「もし、皮膚に湿疹、斑点、疱疹が生じて、皮膚病の疑いがある場合、その人を祭司アロンのところか彼の家系の祭司の一人のところに連れていく。」

(新共同訳)の部分を例にとり、いくつかの英語訳聖書を比較してみたい。まず、多くの近代語訳が参照しているヴルガタ版では次の通りである。

homo in cuius carne et cute ortus fuerit
diversuscolor
sive pustule aut quasi lucens quippiam id est
plaga leprae
adducetur ad Aaron sacerdotem vel ad unum
quemlibet filiorum eius

ヒエロニムスが「レプラ」(上記引用では属格の *leprae*) を用いていることが分かる。これに対して、欽定訳¹⁸ では、

When a man shall have in skin of his flesh a rising, a scab, or bright spot, and in be in the skin of his flesh like the plague of leprosy; then he shall be brought unto Aaron the priest, or unto one of his sons the priests:

とあり、ラテン語の *plaga leprae* を *the plague of leprosy* と訳している。*plague* は、「疫病、悪疫」の他に「天罰のような災い、災難、不幸、不運」という意味をもつから、ラテン語の原義と同様、本来の宗教的な意味を含意している訳と考えることができる。

アメリカで編纂されたこの欽定訳の改訂標準訳 (*The Revised Standard Version*)¹⁹ では、次のような表現である。

When a man has on the skin of his body a swelling or an eruption or a spot, and it turns into a leprous disease on the skin of his body, then he shall be brought to Aaron the priest or to one of his sons the priests,

この改訂標準訳が刊行された 1952 年当時は、社会的に「らい病 *leprosy*」という表現をやめ「ハ

(151-160 頁)を参照。

¹⁷ 同上 (240 頁)

¹⁸ *THE HOLY BIBLE Containing the Old and New Testaments* (Authorized King James Version, A MERIDIAN BOOK.)

¹⁹ *THE HOLY BIBLE The Revised Standard Version Containing the Old and New Testaments* (Authorized King James Version, A MERIDIAN BOOK.)

ンセン病 Hansen's disease」を用いようとする運動が起こっていた時期であり、実際この年、既述（注1）のように、アメリカ医学会が呼称を変更している。とはいえ、聖書の場合は、当時ハンセン病という名称はなかったから、翻訳で Hansen's disease を用いることはできない。この改訂標準訳では、上記のように a leprous disease と改訂されている²⁰。disease は、「病気、疾患」を意味し、plague のような天罰のニュアンスはない。この改訂部分を見るかぎり、社会的な認識の変化を受けて、宗教的祭儀的な意味が薄まっているように思われる。

欽定訳の更なる改訂版である 1989 年の新改訂標準訳 (*New Revised Standard Version*)²¹ では、

When a person has on the skin of his body a swelling or an eruption or a spot, and it turns into a leprous disease on the skin of his body, he shall be brought to Aaron the priest or to one of his sons the priests.

となっており、同様に a leprous disease を用いている。ただし、この版には A term for several skin diseases ; precise meaning uncertain. という注があり、leprosy が多様な皮膚病症状のことを指し、厳密に病名を特定できないことを断っている。

カトリック教会による 1970 年発行の *New American Bible*²² では、

If someone has on his skin a scab or pustule or blotch which appears to be the sore of lep-

rosy, he shall be brought to Aaron, the priest, or to one of the priests among his descendants,

となり、the sore of leprosy と訳されている。sore は、「さわると痛いところ」「皮膚の破れた所」の意味であるが、比喩的に精神的な「傷」や「深い恨み」も意味する。disease 同様、天罰のニュアンスは含まれていない。やはり、こちらも注があり、

Various kinds of skin blemishes are treated here which were not contagious but simply disqualified their subjects from association with others, especially in public worship, until they were declared ritually clean. The Hebrew term used does not refer to Hansen's disease, currently called leprosy.

として、特定の疾病としてのハンセン病を意味しないことを解説している。

このように英語訳聖書では、伝統的に leprosy をそのまま用いている場合が多いが、現代に近づくにつれて、天罰のニュアンスが薄まり、その意味するところについての注釈が登場している。現代の日本語訳聖書では、前述のように「らい」という表現を避ける傾向にあるが、英語訳では依然として leprosy が用いられている。ハンセン病に対する差別や人権侵害に対して、医学的知見の発展に伴って早期に社会的対処を講じてきた欧米と、1996 年によく「らい予防法」を廃止するなど、ハンセン病に対する差別・偏見への対策の遅れがあった日本との、社会的状況の相違を指摘する声もある²³。それ

²⁰ 欽定訳の英国での改訂版 *New English Bible* では、新約 (1961 年) で leprosy とし、脚注を付けている。旧約 (1970 年) では、leprosy は使用せず「皮膚病」等と表現している。また *Good News Bible* (新約 1966 年, 旧約 1976 年) では「恐ろしい皮膚病」と訳しているという。犀川一夫上掲書 (58-59 頁) を参照。ただし、これら二つの英語訳聖書は大胆な意識として知られている。

²¹ "oremus Bible Browser" (<http://www.devotions.net/bible/00bible.htm>) で全文公開されている。

²² 教皇庁 HP で *New American Bible* http://www.vatican.va/archive/ENG0839/_INDEX.HTM は、注を含め公開されている。

²³ 新改訳聖書刊行会編『聖書翻訳を考える』いのちのことば社 2004 年の対談の中で、内田和彦氏は「欧米の場合に、『レブラ』『レプロシー』ということばが選んだのは、差別への取り組みが早くなされて差別が解消されていったから、まあ完全ではないにしても、『レブラ』『レプロシー』ということばを引き続き使うことができたわけです。こういう取り組みを日本はしてこなかった。『らい』ということばは、依然として非常に差別性の強い言葉として残っている」と指摘している (101 頁)。

ぞれの国の言語における現代的な「差別用語」にともなう表現の制約があるなかで、聖書本来のメッセージやその生々しい時代状況をどのように訳し込むかは極めて難しい課題であり、その意味で本件は、日本固有の問題でもある。

6. 批判的見解

本章の最後に、現代の日本語聖書が「らい」という表現を避け「重い皮膚病」と表現していることに対する批判的見解を、二つ取り上げる。

第一は、岩手県気仙地方の方言「ケセン語」を用いて新約聖書を訳した医師の山浦玄嗣氏の見解である。山浦氏はケセン語聖書に取り組む以前に、既に『ケセン語入門』『ケセン語大辞典』などでケセン語の文法、語彙を体系的に研究している²⁴。その蓄積の上に、気仙衆にイエス（ヤソ）の言葉を腹の奥までとどかせたいという熱意に促され、世間に通用しない教会だけの特殊表現をやめ、耳で聞くと意味の取りにくい漢語を避けるなどの基本的方針のもと、ギリシャ語原典からのケセン語訳聖書（四福音書）を完成した。ケセン語ではハンセン病のことを「どす」²⁵と呼ぶ。「マタイによる福音書（マッテアがたより）」では、重い皮膚病を患っている人を清める8章1-4節のタイトルは「癩（どす）ウ治す。」²⁶であり、「ルカによる福音書（ルッカアがたより）」5章12-16節も同じタイトルである。いずれの訳文も「どす」を用いている²⁷。

ケセン語訳聖書の独特の表現については、それぞれの福音書巻末の詳細な解説に加え、山浦氏の著作「ふるさとのイエス」シリーズ三部作²⁸に、より詳しい解説がある。「重い皮膚病」については、シリーズ最初の書『ふるさとのイエス ケセン語訳聖書から見えてきたもの』に解説されている。山浦氏はかつて東北大学抗酸菌研究所助教授であった経験から「らい菌」について造詣が深く、悲惨を極めた患者の社会的扱いについても詳論されている。ひっそりと家に隠れるハンセン病患者に対して「子供だったわれわれは、恐ろしさのあまり悲鳴をあげ、石を投げつけて、逃げた、逃げた」²⁹という同世代の人々の偏見の記憶も背負っている。そのうえで、「重い皮膚病」という訳に対して次のように批判を向ける。

「どす」は「『業病』と言われ、『天刑病』と言われた病を身に負い、社会から棄てられた人々の苦悩と悲惨が、ぎっしりと重く結晶した『レブラ』であり『癩』であり『ドス』」であり、イエスの時代と地域においても同様であったはずである。イエスが寄り添い癒したのは、見捨てられ差別のただなかにあったそのような人々であり、それは「断じて蕁麻疹だか、湿疹だか、わけのわからないただの『重い皮膚病』などではない」「どす」でなければならないと論じる³⁰。

現代日本語訳聖書が「重い皮膚病」と訳すことは、人類の背負ってきた差別と人権侵害の歴史に背を向けるものであるとともに、差別が当然のように機能していた社会で行ったイエスの働きの真意も伝わらないとの見解である。差別

²⁴ 山浦玄嗣『ケセン語入門』協和印刷 1989 年、『ケセン語大辞典』無明舎 2000 年の他、詩集『ケセンの詩』共和印刷 1998 年、『父さんの宝物』女子パウロ会 2003 年など著書が多数ある。

²⁵ 「どす」の「す」は、ケセン語では「す」から横棒をとった文字であり、ワープロソフトの日本語文字に存在しないため、「す」と記した。これは山浦氏が考案した「ケセン仮名」による表記であり、「スとシの中間音。したがって『寿司』『煤』『死す』『獅子』は同音となる」と解説される。山浦玄嗣訳『ケセン語マタイによる福音書』イー・ピックス 2004 年 2 版（17 頁）。以下も便宜上「どす」（「ドス」）と表記する。

²⁶ 「治す」の「す」も、「どす」の「す」と同様（注 25）のケセン語仮名で記されている。

²⁷ 山浦玄嗣訳『ケセン語マタイによる福音書』（69

頁）、『ケセン語訳ルカによる福音書』イー・ピックス 2003 年（69-71 頁）

²⁸ 山浦玄嗣『ふるさとのイエス ケセン語訳聖書から見えてきたもの』2003 年、『走れ イエス！ 続 ふるさとのイエス』2009 年、『人の子、イエス 続々 ふるさとのイエス』2009 年。いずれも出版社はイー・ピックス。

²⁹ 上掲『ふるさとのイエス ケセン語訳聖書から見えてきたもの』（169-170 頁）

³⁰ 同上（170-171 頁）

の記憶が忘却されることが、聖書のメッセージをも損なうことにつながることに同調し、山浦氏のケセン語訳聖書を高く評価する声もある³¹。

第二に、すでに旧約の時代に「ツァラアト」が固有の疾病としてのハンセン病を指していたという見解に耳を傾けたい。国立療養所呂久光明園や長島愛生園などで牧師として働いた播磨醇氏は『極限で見たキリスト—聖書の〈らい〉をめぐる—』という書の冒頭で「聖書から〈らい〉が消える。それがいったいどういうことになるのか、ハンセン病療養所の現場に四十七年間いた牧師として、その危惧と責任感が、この論文を書かせた」³²と語っている。播磨氏はまず、医学的見地からレビ記13章の「患部の毛が白く変わり、かつ患部が身の皮よりも深く見えるならば、それは〈らい〉の患部である」という「レプラ」の診断基準の一つが、「L型（らい腫型）らいの場合には、いまでも初期診断の基準」³³として通用することを、専門家の見解を援用して説明している。すなわち、「本病の初期症状は皮膚の表面に現れるのではなく、少し深い部分に現われる、皮膚の組織でいいますと真皮にでてくるといことです。その変化を我々は真皮の上層に存在する表皮を通して観察することになるので、結果として少し深いところ

ろにあると見えるわけです。』³⁴という専門家の見解により、レビ記の記述が、固有の疾病としての「L型らい」であったことが裏付けられると指摘する³⁵。先にレビ記の書かれた時代にはパレスチナ地域にハンセン病が存在しなかったことの根拠として挙げられていた「末梢神経の麻痺症状など特有の症状が明記されていないことは不合理」（本章2及び注8）であるという見方についても、「現在、らい患者の殆どの者は、医学地理的熱帯地方に住んでいて、その症状は一般に軽症であり、T型（類結核型）とL型（らい腫型）との中間型（ボーダーライン）が多く、そこでは末梢神経麻痺が初期診断の基準になっていることは事実である。しかし、その診断基準を旧約聖書レビ記一三章の〈らい〉の皮膚症状の記載に適用し、ハンセン病の重要な症状である末梢神経麻痺のないことを理由に、聖書の〈らい〉を否定してしまうことは、やはり大きな誤りであったと言わざるを得ない」として、時代によって病気の型の相違が生じる点を根拠に批判している。

播磨氏の見解は医学的見地にとどまらず、療養所で牧師として患者に寄り添った自身の経験から、排除と差別の歴史の記憶を忘れてはならないという思いが語られている。治療薬の登場によって療養所の世界は「〈らい〉の世界からハンセン病の世界へ大きく移り変わった」が、患者たちが背負ってきた「悲惨だった過去をただ打ち消してしまう」ことにつながることを危惧し、「重い皮膚病」という表現に反対している。播磨氏は学生時代に療養所内の重病棟で、ひとりの婦人の顔を見て「うち震え、私はそのまま意識を失っていた」「そのまま逃げるようにして、その場を去ったのである。必死になって救

³¹ 浜島敏は近著で「日本は、どの国よりもこの病を患っている人たちに対する差別がひどかった国です。ですから「癩病人」という言葉は避けなければなりません」として日本語訳聖書における「らい」の使用には否定的である一方、現行の新共同訳と対照的な態度として山浦氏のケセン語訳を紹介し、「医師として真剣にこの問題と取り組んだ人にしか言えない、重みのある言葉です」と記している。その上で「差別語と言われる言葉を使わなくすることで差別がなくなる」ことはなく、「意識改革」が必要であると説いている。イエスの福音が「意識改革ですし、差別そのものの撤廃」であるからである。浜島敏『日本語聖書も「神の言葉」』キリスト新聞社2011年（260-263頁）

³² 播磨醇、上掲書（11頁）

³³ 同上（13頁）

³⁴ 同上（15頁）で、京都大学の皮膚特研の西占貢教授の見解として紹介されている。

³⁵ 加えて、前国立ハンセン病療養所長島愛生園々長である中井栄一医師の見解として、「レプラ」の原意が「うろこ」であるのは、未治療の「L型らい」の症状であり、そこから「レプラ」と名付けられたとも指摘している。同上（16頁）

いを求めている婦人の前で」という自身の苦い経験を、「〈らいと私〉との出会いの原点」と認識している³⁶。このことから、差別を忘れてはならないという思いこそが播磨氏の批判にとってより本質的であり、この思いは、上記の山浦氏と根底では共通しているように思われる。

第2章 ケベック外国宣教会と松丘保養園

1. キリスト教福祉とハンセン病施設

第1章で見たように、多様な皮膚症状を含む宗教的意味を有する聖書の「ツァラアト」「レプラ」は、中世以降、ハンセン病という特定の皮膚病を指すこととなり、ハンセン病患者は単なる病者ではなく「罪」や「神の罰」という重い意味を背負わされ、扱われるようになる。一方で、「レプラ」の人々の清めを行ったイエスの行為は人間業を超えた奇跡であるにとどまらず、愛の証しであり、キリスト教徒が実践すべき愛のわざのモデルとなった。福音書においてイエスは、人が天の国に受け入れられる根拠を、「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたから」であるとし、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」と語っている³⁷。このような信仰から、貧者や病者に奉仕する福祉の実践は、キリスト教世界では早くから行われてきた。すでに4世紀にはハンセン病患者に対する福祉事業が見られる。すなわち、カッパドキアのカエサリアの司教であった聖バシレイオス（329年

頃-379年）が、ハンセン病患者のための病院「xenodochion（見知らぬ人のための家）」を開設したことが知られている³⁸。

近代日本においてもハンセン病患者の治療施設は、国家よりも先にキリスト教の宣教師たちによって着手された。静岡県内の神山復生病院、熊本の待労院、聖公会による熊本の回春病院などが知られている³⁹。

他方、公立療養所は、1907（明治40）年の「らい患者収容に関する法律」（「癩予防ニ関スル件」）により、連合府県立の形で設置されていく。1930年（昭和5）には国立の長島愛生園が設置され、その他の公立療養所も戦時中に国立となった。これら公立・国立療養所の患者に対するキリスト教宣教師や信者による宣教や慰問も活発に行われた。ハンセン病患者に対する積極的な対応は、イエスの愛の精神を模範とする信仰に適った行為であり、キリスト教徒にとっては特別な意味をもっていた。しかしハンセン病患者への偏見の影響は根強く、後に、福祉施設や療養所での奉仕に献身したキリスト教徒が、結果的に患者の「隔離」を推進した側と見なされ、批判の対象にもなった。

2. ケベック外国宣教会と青森県

カナダのフランス語系地区ケベック州出身の宣教師たちと日本との関わりは深く、1898（明

³⁶ 同上（23頁）。また、同頁では次のようにも述べられる。「聖書の中の〈らい〉を取り扱う場合、それを現在の〈ハンセン病〉とすることは、過去の暗い悲惨だった〈らい〉の事実を歪曲することになるし、まして、それを〈重い皮膚病〉とすることは過去の事実をきれいに流して、〈らい〉の問題を解消してしまうことになる。」

³⁷ マタイによる福音書25章34-40節

³⁸ ナジアンゾスの聖グレゴリウスは、この施設によって「死を前にした死体のような人々が、町、公共の場所、運河から追放されるという、恐ろしく哀れな光景をものはやわれわれは見ることがない」と語ったという。また聖バシレイオスは多くの修道会の修道規則の原型をつくったが、福祉事業の展開により、修道会にはホスピスが置かれ、修道士の間では薬用植物の知識が蓄えられていったとされる。アルバート・R・ジョンセン著／藤野昭宏・前田義郎訳『医療倫理の歴史—バイオエシックスの源流と諸文化圏における展開』ナカニシヤ出版2009年（29-30頁）

³⁹ 日本のハンセン病施設におけるキリスト者の活躍については、森幹郎『足跡は消えても—ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社1996年、杉山博昭『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』大学教育出版2009年に詳しい。

治31)年に1名の修道女が来日して以来、1939(昭和14)年には日本で活躍するケベックの司祭は56名、修道女が100名、修道士が13名に達している。戦争中は多くの宣教師が引きあげや抑留を余儀なくされたが、戦後はさらに宣教師の数は増え続け、1970(昭和45)年のピーク時には、司祭116名、修道女189名、修道士56名の計405名のケベックの宣教師が日本に在住している。1992年の時点でも計340名の宣教師が在日している⁴⁰。ケベック州としては、ひとつの国に対してこれほど多くの宣教師を送り出している例は他にないという。

本章でとりあげる「ケベック外国宣教会」は、1921年にケベック州モンリオール市のカトリック司教団によって海外宣教を目的に設立された宣教会である。当初の宣教地は中国であったが、1937年にフィリピン、1942年にキューバに広がり、戦後の1948年に日本へ21人の宣教師を派遣している。同会は、青森県の宣教司牧を担当することになり、現在もなお、青森県、東京都、神奈川県などで宣教師たちが活躍している。

青森県のカトリック教会は、現在、仙台司教区に属しているが、かつては函館に司教座があり、函館代牧区に属していた。当初の司牧担当はフランスのパリ外国宣教会であり、1930(昭和5)年にカナダ管区ドミニコ会に移管された。青森県の所属が仙台教区となったのは、司教座が函館から仙台に移った1936(昭和11)年である。そして終戦後の1949(昭和24)年に、青森県の司牧担当はドミニコ会から、同じカナダのケベック外国宣教会に移管し、パラン神父が同会の最初の日本管区長に就任した⁴¹。

ケベック外国宣教会が青森県に最初に設立し

た教会は、1950(昭和25)年の三沢教会である。翌1951(昭和26)年には、青森市浜町に同会の本部を設け、戦中に焼失した浜町教会を復興し、翌1952年には浪打教会が設立された。同年に八戸塩町教会のクルノワイエ神父⁴²は、鮫町に教会とファチマ幼稚園を開設している。1954(昭和29)年には、下北半島の宣教拠点として、大湊教会が設置された。現存する青森県内のカトリック教会の多くが、ケベック外国宣教会が母国カナダの信者の寄付や支援を受けながら設置したものである⁴³。標高七百メートル近くの八甲田の山間の開拓地に建てられた善光寺平教会もまた、ケベック外国宣教会のデュメン神父の尽力によるものであった⁴⁴。

3. 松丘保養園の概要

前述のとおり、日本におけるハンセン病患者のための施設は、早くからキリスト教の宣教師の手によって設立されていたが、1907(明治40)年に「らい患者収容に関する法律」が公布されてから、公立・国立の療養所も整備されはじめた。

1909(明治42)年に東北6県と北海道の連合立として、油川村にある90床の隔離病舎に第二区道県立北部保養院が設立された。同年秋には東津軽郡新城村、現在の青森市松丘に移転した。この北部保養院が、1941(昭和16)年に厚生省に移管され、国立療養所松丘保養園と

⁴² クルノワイエ神父は、光星学院高等学校の初代校長でもある。

⁴³ ケベック外国宣教会の来日以降の歩みについては、ケベック会日本宣教50年記念事業委員会発行の記念誌『からしだね』1998年に詳しい。

⁴⁴ 筆者は、善光寺平の開拓地で僻地教育に取り組んだキリスト者川村郁について調査した(拙著『津軽のマリア川村郁』聖母の騎士社2009年)が、その際、関係者への取材の中で、川村郁が国立療養所松丘保養園のハンセン病患者を慰問していたというエピソードを聞いた。松丘保養園が日本最北の国立のハンセン病療養施設であることや、療養所内にケベック外国宣教会によって松丘カトリック教会が建てられていることをその時始めて知った。そのことが、本研究にとりくむ契機となった。

⁴⁰ リシャー・ルクレール／大島俊之・栄子訳『日本で活躍したケベック人の歴史』三交社 1999年(175-178頁)にある、日本在住のケベック人の数(1898年～1992年)の統計表による。

⁴¹ 青森県のカトリック関係史については、小野忠亮『青森県とカトリック宣教百年史』百年史出版委員会1982年に詳しい。

して発足した⁴⁵。松丘保養園は、発足以来、逐次増床し、ピーク時の昭和33年には病床は950床、入所者数は721名に及んでいる。松丘保養園の入所者は、差別的に「北方らい」などと呼ばれ、重傷者の多い療養所と見なされていたという。

戦後、国際的にはハンセン病の特効薬の開発普及がはじまり、各国で隔離政策からの転換や偏見を除去するための社会政策がはかられたものの、日本では1953（昭和28）年に「らい予防法」が成立し、隔離政策は継続された。「業病」「天刑病」などという偏見が根強く残り、とくに日本の公立・国立療養所では、隔離政策に加え、入所者同士の結婚が認められるかわりに断種手術が強要されていた。厚生省の指示による断種手術は、国家による患者の人権侵害という非難を浴びることになる⁴⁶。

1996（平成8）年の「らい予防法廃止に関する法律」により、「らい」という呼称は「ハンセン病」に改められ、ようやく隔離政策が解かれた。この法律は、ハンセン病患者に必要な治療と援護が明記されたもので、衆議院厚生委員会の付帯決議として「深い反省と陳謝の念に立って」、患者の社会復帰等の支援を図ることやハンセン病に関する正しい知識の啓蒙を論じている。しかし入所者たちの社会復帰を図るには、この法改正は遅すぎた。1999（平成11）年4月1日現在における松丘保養園の入所者は、43歳から96歳までの男女272名であり、平均在園年数は46.4年、平均年齢は72.9歳と

高齢化が顕著である⁴⁷。「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」で原告が全面的に勝訴し、国が謝罪したのは2001（平成13）年であり、まだ記憶に新しい。国立療養所松丘保養園のたどった歴史は、日本のハンセン病患者への対応の歴史的推移を映し出すひとつの鏡でもある。

4. 松丘カトリック教会とケベック外国宣教会

国立の施設にもかかわらず日本のハンセン病療養所には、多くの場合、宗教施設とくにキリスト教の教会が早い時期に設置されている。これはキリスト教の側から見れば、先に述べたように、ハンセン病患者の支援に携わることがイエスの行動を模範とするもので、キリスト教信仰上特別な意義があることから、古くから多くのキリスト教徒が療養所の創設、患者への宣教や慰問に積極的に従事したことが背景にある。とくに日本では、一般の信者数が伸び悩む中、宣教師にとって療養所は効果的な宣教の場でもあった。他方で、療養所側の事情もあることが指摘されている。入所者のなかには療養所内の治安を乱す者もあり、「宗教は患者を温和にさせるうえで、効果が期待された。死後の葬儀のための事務上の必要のため、入所者が宗教を決めておくという習慣もあった」⁴⁸という。

松丘保養園の『九十周年記念誌』の資料には、宗教別入所者数が掲載されている⁴⁹。1999（平成11）年4月1日現在、何らかの教派教団に属している信者数は232人であり、これは入所者数の85%を占めている。ちなみにキリスト教の会派では、松丘聖ミカエル教会（37名）、松丘カトリック愛徳会（35名）、松丘聖生会（25名）となっており、他に仏教系、創価学会、天理教などの宗派が見られる。

松丘保養園のキリスト教関連の概要は次のと

⁴⁵ 国立療養所松丘保養園編『創立八十周年記念誌』平成元年の沿革と年譜（31-39頁）を参照。

⁴⁶ 教義により断種手術は認められないカトリックの影響力の強い療養所では、厚生省の出産中止の指示に抗して入所者の出産を許容する施設もあった。例えばカトリック信者の多い奄美大島の奄美和光園では、乳児院の名瀬天使園、児童養護施設の白百合の寮が設置され、入所者の出産に対応した。このことについては、杉山博昭の上掲書第5章「奄美大島におけるカトリックの影響—入所者の出産を中心に」（187-221頁）で詳細な研究がなされている。

⁴⁷ 松丘保養園編『創立九十周年記念誌』平成12年（153-157頁）

⁴⁸ 杉山博昭上掲書（55頁）

⁴⁹ 上掲『創立九十周年記念誌』（158頁）

おりである。1912（大正元）年にまず聖公会の伝道が開始され、その後1920（大正9）年からホーリネス教会の伝道が始まり、両会派はともにハレルヤ会を結成する。カトリックでは1931（昭和6）年にカナダ管区ドミニコ会のデルエン神父の来訪が始まり1933（昭和8）年頃から信徒が増加する。各会派共用の礼拝堂もあった。いずれも戦中に反キリスト教的気運が高まり活動が滞るが、戦後復興し、聖公会、カトリック、ホーリネスは、「聖生会」として会をともにする。1951（昭和26）年にカトリックは「松丘カトリック愛徳会」を結成し、聖公会も1956年に松丘ミカエル教会として独立する。1957（昭和32）年には松丘カトリック教会が完成した。

以下、カトリック関係について整理する⁵⁰。上述のデルエン神父が松丘保養園を訪れた発端は、1931（昭和6）年、入園患者であった山本健太郎が青森浜町教会に連絡し、司祭の来園を依頼したことにあるとされている。山本健太郎は、静岡県 の 復生病院です で に カトリックの洗礼を受けていた。デルエン神父は青森と弘前の教会を担当していたことから月に1度か2度の来園であったが、信者は増えていった。昭和11年には火災で共用の礼拝堂が燃え、ミサ用具などを失う。また戦争が近付くにつれて当局から洗礼を差し止められるという事件も起きている。1941（昭和16）年に開戦を迎えると、カナダは日本の敵国に当たるためデルエン神父は抑留された。戦中戦後にかけては、小野忠亮、児山六七男、平塚秀雄ら日本人司祭が来園した。一時期10名を数えた信者は、食糧難と治療薬不足により、終戦時には信者は1名のみとなった。

前述のように、終戦後の1949（昭和24）年に、

青森県の司牧担当はドミニコ会から、同じケベック外国宣教会に移管した。そして1950（昭和25）年から松丘保養園にはケベック外国宣教会の司祭が来訪するようになる。まずレフエーヴェル神父が着任し、毎週一回来園してミサを挙げた。また松丘カトリック愛徳会を結成し、信仰共同体の基礎をつくった。レフエーヴェル神父は信者の要請を受けて、カナダのカトリック信者から建設資金のための寄付を集め、1957（昭和32）年に松丘カトリック教会堂が完成した。レフエーヴェル神父は「信徒の数が五〇名になったら建ててあげましょう」と語っていたが、教会献堂式に50人目の受洗者があったというエピソード⁵¹が残っている。

教会堂の建設の功績にはレフエーヴェル神父の名前が挙げられるが、ある信徒の回想に「マルセル・クレポー神父様は、わが教会の聖堂を造られた最大の恩人であります」⁵²と記されているように、記録としては上述の主任司祭が松丘の教会に奉仕したが、実際には多くのケベック外国宣教会の司祭が入れ替わり来園し、宣教司牧にあたったようである。

教会活動は活発になり、1963（昭和38）年にはボリユー神父によって教会の西側に信者の練成の場である伝道館が建てられた。伝道館の建設資金もまた、カナダで寄付を募ったものである。信者たちは伝道館の前庭にルルドの洞窟をつくりマリア像を祀った。

ルフェーヴェル神父は1967（昭和42）年に帰国し、後任にヴィンサン神父が、さらに1978（昭和53）年にはデュベ神父が就任した。ドミニコ会のデルエン神父の宣教から50年、教会献堂25周年となる1982（昭和57年）には、信徒数は61名に上った。以降、1987（昭和62）年にラヴォア神父、後にランドルヴィル神父に引き継がれた。現在は仙台司教区司祭が、青森市の本町教会・浪打教会とともに松丘カト

⁵⁰ 以下の記述については、主に上掲『創立八十周年記念誌』の岡村健二氏による「カトリック教会の歩み」（208-210頁）及び上掲『創立九十周年記念誌』の滝田十和男氏による「松丘を愛した神父様たち」（134-135頁）を参照した。

⁵¹ 上掲『青森県とカトリック』（291頁）

⁵² 上掲『からしだね』（18頁）の滝田氏の回想による。

リック教会の司牧にあたっている。

日本のカトリックにおける療養所への宣教の特徴は「明確な意思で療養所伝道を試みたというより、たまたま信徒が入所し、そこから始まるのがパターンである」、「カトリックはひとたび教会が設置されれば、当然の義務として神父の来訪などの支援がなされ、安定した運営が可能になる」⁵³との指摘がある。確かに松丘保養園の場合も、最初にドミニコ会のデルエン神父が来園した契機は、入所者の依頼によるものであった。戦中戦後の混乱を経た後、ケベック外国宣教会の宣教師が教会堂を建設したことは、その後に続く信者に対する司牧拠点を整備したという点で、宣教会としての目的を十分に果たしたといえる。ただし安定的な運営という面では課題は多い。現在、ケベック外国宣教会の宣教師たちは高齢化による引退等で減少している。信者数、司祭数の伸び悩みはすでにカトリックの全国的な傾向である。松丘保養園の入所者が減少傾向にある中、松丘カトリック教会の信者も大幅に減少し高齢化している⁵⁴。

結 語

本稿では、キリスト教とハンセン病との歴史的関係を聖書翻訳の問題を中心に概観しつつ、戦後青森県の宣教司牧を担当したケベック外国宣教会と国立松丘保養園の松丘カトリック教会との関わりについての諸情報を整理した。今後、さらなる調査により研究を継続したい。

参 考 文 献

- ・アルバート・R・ジョンセン著／藤野昭宏・前田義郎訳『医療倫理の歴史—バイオエシックスの源流と諸文化圏における展開』ナカニシヤ出版 2009 年
- ・伊藤俊太郎『近代科学の源流』中央公論社 1978 年
- ・小野忠亮『北日本カトリック教会史』中央出版社 昭和 45 年
- ・小野忠亮『青森県とカトリック宣教百年史』百年史出版委員会 1982 年
- ・ガレノス／内山勝利編訳・種山恭子訳『ガレノス 自然の機能について』（西洋古典叢書）京都大学学術出版会 1998 年
- ・楠本史郎『聖書翻訳史の光と陰 下』『北陸学院短期大学紀要 40』2008 年
- ・ケベック会日本宣教 50 年記念事業委員会『からしだね』1998 年
- ・犀川一夫『聖書のらい その考古学・医学・神学的解明』新教出版社 1994 年
- ・新改訳聖書刊行会編『聖書翻訳を考える—『新改訳聖書』第三版の出版に際して』いのちのことば社 2004 年
- ・『新共同訳旧約聖書注解 I 創世記—エステル記』日本キリスト教団出版局 1996 年
- ・杉山博昭『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』大学教育出版 2009 年
- ・浜島敏『日本語聖書も「神の言葉」』キリスト新聞社 2011 年
- ・播磨醇『極限で見たキリスト—聖書の《らい》をめぐって—』キリスト教図書出版社 2007 年
- ・B. ファリントン著／出隆訳『ギリシャ人の科学—その現代への意義—（下）』岩波新書 1968 年
- ・松丘保養園編『創立 60 周年記念誌』1969 年
- ・松丘保養園七十周年記念誌刊行委員会編『秘境を開く（そこに生きて七十年）』北の街社 1979 年
- ・松丘保養園編『創立九十周年記念誌』2000 年
- ・森幹郎『足跡は消えても ハンセン病史上のキリスト者たち』ヨルダン社 1996 年
- ・リシャー・ルクレール／大島俊之・栄子訳『日

⁵³ 杉山博昭 上掲書（68 頁）

⁵⁴ ある入所者信者は、「偏見と差別の根源であったライ予防法が廃止され、病名もハンセン病と改められました。然し時すでに遅く私たちの高齢化がすすんで、後遺症による不自由なものが多くなり、老人のみによる教会運営にも、困難を来している現状です」と記している。上掲『からしだね』（33 頁）参照。

本で活躍したケベック人の歴史』三交社 1999 年

- X. レオン デュフル編／Z. イェール訳監『聖書思想事典』三省堂 1973 年
- 山浦玄嗣『ふるさとのイエス ケセン語訳聖書から見えてきたもの』イー・ピックス 2003 年
- 山浦玄嗣『人の子、イエス 続々 ふるさとのイエス』イー・ピックス 2009 年

聖 書

- 『新共同訳聖書』（続編つき）日本聖書協会 2009 年版
- 新改訳聖書刊行会『聖書（新改訳）』いのちのことば社 2004 年版
- フランシスコ会聖書研究所訳『聖書（原文校訂による口語訳）』サンパウロ 2011 年版
- 山浦玄嗣訳『ケセン語マタイによる福音書』イー・ピックス 2004 年 2 版
- 山浦玄嗣訳『ケセン語訳ルカによる福音書』イー・ピックス 2003 年
- *BIBLIA SACRA, IUXTA VULGATAM VERSIO-*

NEM (DEUTSCHE BIBELGESELL-SCHAFT) 2007

- *THE HOLY BIBLE The Revised Standard Version Containing the Old and New Testaments* (Authorized King James Version, A MERIDIAN BOOK.) 1974
- *THE HOLY BIBLE Containing the Old and New Testaments* (Authorized King James Version, A MERIDIAN BOOK.) 1974
- Web site ; “*oremus Bible Browser*” (<http://www.devotions.net/bible/00bible.htm>)
- Web site ; *New American Bible* (http://www.vatican.va/archive/ENG0839/_INDEX.HTM)

* 本稿は、平成 22 年度八戸大学特別研究費人間健康学部プロジェクト（共同研究テーマ「三八地区における健康影響の近未来予測」）における個別研究「青森県におけるケベック外国宣教会の活動」の研究成果である。